



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3147 号 2016.7.27 発行

社説 障害者施設襲撃 痛ましさに言葉を失う

毎日新聞 2016年7月27日

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で働いていた26歳の元職員の男が夜中に施設を襲撃し、ナイフで入所者を次々と刺し、19人が死亡し、26人が重軽傷を負った。

刃物による殺傷事件の犠牲者数では戦後最悪だ。

数十分の間に多くの人々が被害に遭った。無差別だったとみられる。被害者は重度の障害を抱え介護が必要な人たちだ。夜間でもあり無防備、無抵抗だっただろう。あまりに残忍で冷酷というほかない。

被害者の感じた恐ろしさ、突然命を絶たれた無念さを察すると、痛ましさに言葉を失う。

男は自ら警察に出頭し、逮捕された。「障害者がいなくなればいいと思った」と供述しているという。

同園は神奈川県が設置し、社会福祉法人「かながわ共同会」が運営している。知的障害者ら149人が入所していた。

男はハンマーでガラスを割って侵入したようだ。事件当時、夜勤職員8人と当直の非常勤警備員がいた。居室は原則無施錠だったというが、防犯体制は十分だっただろう。

障害者が多数入所している以上、いざという時に職員を含めた周辺が支え助ける仕組みは不可欠だ。

犯行の態様は十分に分かっていないが、男に結束バンドで縛られた職員もいたという。周到な計画性がうかがわれる。事件当時の状況をしっかり調べ、今後の対応に生かさなければならぬ。

男は今年2月、衆院議長公邸を訪れ、「障害者総勢470名を抹殺することができます。職員の少ない夜勤に決行致します」などと書かれた手紙を渡そうとしていた。

男はその直後、施設職員にも「重度障害者を殺す」などと話し、警察の事情聴取を受けていた。

結局、医師の診断の上、行政命令で入院させる措置入院とされ、施設を退職していた。措置入院の際は大麻の陽性反応も出たという。ただし、3月初旬には入院の必要性がなくなったと診断され、退院していた。

退院させた病院の判断は適切だったのか。入院のきっかけとなった犯行予告も踏まえ、男の退院後も警察や施設は十分に連携し対処していたのか。検証が欠かせない。

動機については、軽々に判断すべきではない。男の言い分をうのみにすることもできないだろう。捜査や今後行われるであろう精神鑑定を通じて事件に至る経緯を解きほぐしていくしかあるまい。

事件を受け、塩崎恭久厚生労働相は、職員2人を現地に派遣し、再発防止策を検討すると述べた。この際、障害者施設の運営上の課題を十分に点検すべきだ。

社説：障害者19人殺害 まずは不可解な動機の解明だ 読売新聞 2016年07月27日

犯罪史に残る凄惨な事件である。

神奈川県相模原市の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」に刃物を持った男が侵入し、入所者らを次々と襲った。19～70歳の男女19人が死亡し、重軽傷者も26人に上った。

就寝中の入所者を狙った未明の凶行だった。突然、刃物を突き立てられた入所者の恐怖と苦痛は、いかばかりだったか。

施設の元職員の男が、県警津久井署に出頭し、殺人未遂容疑などで緊急逮捕された。男は容疑を認め、県警は殺人容疑に切り替えて取り調べる。所持する複数の刃物に血が付着していた。

ハンマーで窓ガラスを割って侵入し、夜勤職員を結束バンドで縛って犯行に及んだ可能性がある。周到な計画性がうかがえる。

不可解なのは、動機である。男は取り調べに、「障害者なんていなくなればいい」という趣旨の供述をしているという。

予兆はあった。男は2月14日と15日、夜間の犯行を予告するような手紙を東京の衆院議長公邸に持参し、警視庁が津久井署に対応を引き継いでいた。

男が「重度障害者の殺人はいつでも実行する」と話したため、津久井署は相模原市に通報した。

市は「自傷他害の恐れがある」として2月19日、緊急措置入院を命じ、男はこの日、3年余り勤めた施設を自主退職した。在職時にも、障害者を冒瀆するような発言があったという。退職に至った経緯が動機解明のカギとなろう。

入院時の検査では、大麻の薬物反応も確認されたが、市は3月2日、「症状がなくなった」とする病院の診断に基づき、男を退院させた。この判断と、その後の対応について検証が不可欠だ。

これほどの重大な殺傷事件を許したことは、社会にとって痛恨事である。事件を受け、安倍首相は「真相究明に政府としても全力を挙げていく」と強調した。

菅官房長官は、厚生労働省を中心に、関係省庁間で再発防止策を検討する方針を示した。そのためには、神奈川県警が事件の全容を解明することが前提となる。

福祉施設の防犯態勢の再点検を進めるべきだ。利用者にとって使いやすい開放的な構造が、防犯上の盲点となっているケースなどはないか。施設管理者は確認を急ぎ、改善に努めてもらいたい。

地域住民の理解なしに、福祉施設は成り立たない。施設が地域から孤立しないためにも、事件の再発防止を徹底せねばならない。

社説：相模原の事件 犯行生んだ闇の解明を 朝日新聞 2016年7月27日

障害を抱える老若男女が静かに暮らす施設で、身の震えるような事件がおきた。

相模原市できのうの未明、26歳の男が施設に押し入り、知的障害者ら19人の命が奪われ、多くの人が負傷した。

その経緯から浮かび上がるのは、強烈な殺意と、不気味に冷静な計画性である。犯罪史上でも特筆される異様な事件だ。

複数の刃物を準備し、ハンマーで窓を割って侵入。職員を結束バンドで縛り、寝ていた入所者を次々に切りつけた。そして警察に出頭した。

男は今年2月ごろ、「障害者が生きているのは無駄だ」と書いたビラを施設の近くでまき、保護者の同意で安楽死させられるように求める手紙を衆院議長公邸に持参していた。

どんな事情であれ、障害者に対する危険な偏見は断じて容認できない。事件はどんな経緯で起きたのか。捜査当局は徹底した解明を進めてほしい。

事件を不可解にさせるのは、男がこの施設で3年以上も働いていたという事実だ。

施設では、10～70代の149人が共同生活を送り、160人を超える職員が働いている。

日常の世話を通じて障害者らと親密に接し、家族や関係者らとも交流があったはずだ。その経験を積んだ男が「障害者」を狙い撃ちしたとすれば、なぜなのか、事件の闇は深い。

男の言動について連絡を受けた市は2月、精神保健福祉法にもとづいて、男が自分や他人を傷つける恐れがあるとして措置入院させていた。12日後には入院の必要はなくなったと診断され、退院したという。

措置入院は、本人や家族の同意と関係なく、行政が強制的に命じるものだ。必要以上に長びかせれば重大な人権侵害につながる。

ただ、入院の直前に議長公邸に持参した手紙で、男は犯行を「予告」していた。その中に記されている手口は、今回の事件で起きたことに重なる。

退院時には、家族と同居する約束になっていたが、実際にはどうだったのか。男の治療と見守りは十分だったのか。本人と家族への支援体制や、医療と警察との連携などについて、綿密に検証する必要がある。

男は4、5年前には教員を目指しており、教育実習先の学校では子どもたちから慕われていたという。穏やかな人柄とみられた若者が一転、犯行に走った背景に何があったのか。

現代社会のありようも含めた広い視点から今後の捜査を見つめ、考えるほかない。

社説：相模原の施設で惨劇 弱者を狙ったのはなぜか 北海道新聞 2016年7月27日

信じられない事件が起きた。

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」にきのう、刃物を持った男が侵入し、入所者を次々に襲った。

神奈川県警などによると19人が死亡し、多くの重軽傷者も出た。

犠牲者の数では、戦後最悪の殺人事件である。

男は2月までこの施設で働いていた元職員で、警察に出頭し、殺人未遂容疑などで逮捕された。容疑を認め、「障害者なんていなくなってしまう」との趣旨の供述をしているという。

多くの人たちを殺傷した動機は何なのか、知的障害のある社会的な弱者らを狙ったのはなぜか。

疑問が尽きない。社会に与えた不安も大きい。捜査当局は全容解明を急ぐとともに、関係機関は負傷者や家族への心のケアをしっかりと行ってほしい。

その一方で、私たちが問題として考えたいのは、背景に社会的な「ひずみ」はなかったのかという点だ。さまざま角度から事件の「なぜ」に目を凝らしたい。

■計画性うかがわせる

これまでの捜査から、元職員は入所者が寝静まった未明、施設1階の窓ガラスを割って侵入。殺害に及んだとみられる。

突然押し入ってきた男に命を奪われ、傷つけられた人たちの無念や苦痛はいかばかりだったか。いかなる理由があろうと、決して許されることではない。

元職員は出頭した際、複数の包丁やナイフが入ったかばんを所持していた。計画性を強くうかがわせる。警察による事件の経緯や動機の解明が待たれる。

相模原市によると、元職員は2月、施設関係者に「障害者を殺す」と発言し、警察が事情聴取していたという。その後の警察の対応を検証する必要がある。

事件当時の施設の警備体制なども改めて点検してほしい。

■認知症の患者も被害

それにしても、弱者が狙われた事件が近年、目に付く。

例えば、2014年に川崎市の介護付き有料老人ホームで起きた事件だ。ホーム職員の20代の男が、認知症の高齢者ら3人を高いベランダから相次いで投げ落とし、殺害した。

逮捕されたホーム職員は殺害理由について「(入所者が)言うことを聞いてくれなかった」と話していたという。

今回の容疑者も、障害者に嫌悪感を抱いているような物言いをしている。

両事件は状況は異なるが、相手の人間性を顧みない異様さは共通する。仮に仕事上の鬱積(うっせき)などがあつたとしても、短絡的に弱者の生命を奪うことは理解できない。

単独犯による殺傷事件で記憶に新しいのは、17人が死傷した08年の東京・秋葉原事件だ。

死刑が確定している元派遣社員の男は、事件当時20代。判決によると、没頭していたインターネットの掲示板で嫌がらせを受け、怒って犯行に及んだという。

これが直接の動機とされるが、仕事を辞め、社会での居場所を失ったと思いつめたことが、事件の背景にあつたという。

「自分の人生がうまくいかないのは、社会のせいだ。事件を起こしてしまえ」。そんな身勝手な論理が受け入れられるはずがない。

だが、最近の殺人事件では「誰でも良かった」「死刑になりたい」などという供述が目立つ。

ここにも自己中心的な考えが見てとれる。理不尽だが、これもまた「現実」の一断面である。

■事件は時代を映す鏡

私たちは、助け合いを美德として、他人への思いやりを大切にする世の中を目指してきた。

弱者や周りで困っている人がいれば、当たり前のように手を差し伸べる一。描いてきたのは、そんな社会だ。

それが今回のような事件に直面すると、理想の足元で大きなほころびが生じている感が拭えない。

殺人事件には、必ず明確な動機があるとされてきた。

しかし、その「動機」が見えにくくなっている。逮捕された犯人に対し、周囲が「あの人が」と、驚くケースも少なくない。

被害者は無関係だったり、犯人が一方的に被害妄想を抱いていただけだったりする。

人間関係が希薄になる中で、犯行はより残忍になっている。

あらゆる場面で格差が生まれ、社会を言いようのない閉塞(へいそく)感が覆っている。

それがぎすぎすした空気を助長し、こうした事件と結び付いてはいないか。そう思うと、やり切れなさばかりが募るが、諦めてはならない。危機感を持つべきだ。

事件は、社会や時代を映す鏡と言われる。だからこそ、私たちはしっかりと、その鏡に潜む深い「闇」を見極めたい。

社説 障害者施設殺傷 許されない命の蹂躞

中日新聞 2016年7月27日

残虐極まりない犯行に胸がつぶれる。相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で発生した無差別殺傷事件。強い恨みか、差別意識か。人の命と尊厳が、なぜやすやすと蹂躞(じゅうりん)されてしまったのか。

狙われたのは、身の回りの介助が欠かせない知的障害者たちが入所する施設だった。寝込みの犯行に加え、心身の不自由さからも、襲撃された人の多くは全く事態がのみ込めなかったに違いない。

犠牲者は十九人に上り、殺人事件としては戦後最悪という。強い憤りと深い悲しみを覚えざるを得ない。

警察に逮捕されたのは、この施設に二月まで三年余り勤めていた元職員(26)だった。「障害者がいなくなればいいと思った」といった供述をしている。

職場への不満を募らせていたのか。障害者を劣った存在として排除する優生思想も垣間

見えるから、がくぜんとさせられる。動機の解明を徹底せねばならない。

とはいえ、元職員も精神疾患を抱えていたようだ。

衆院議長宛てに、障害者を安楽死させられる世界を訴えた手紙を書いたり、警察に大量殺人の実行を示唆したりした。相模原市は「自傷他害の恐れ」があるとして、精神保健福祉法に基づき、三月まで措置入院をさせた。

難しい問題が横たわっている。

懸念されるのは、批判の矛先が行政や病院、警察に安易に向かいかねないことだ。元職員の危うい兆候を把握しながら、なぜ凶行を未然に防げなかったのか、と。世間の心情としては当然だろう。

そこは注意を払いたい。そうした批判は、ともすると地域で暮らす精神障害者への差別や偏見を助長しかねないからだ。

憎むべきは犯罪そのものだ。犯人はそれを償わねばならない。

全国で相次ぐ障害者への虐待事例を思いおこしてみる。厚生労働省のまとめでは、二〇一四年度の施設での虐待に関する通報や相談は千七百件余りに上った。今度の事件と同根の部分はないか。

高齢化が進むにつれ、心身の機能が衰えた人は増える。施設の安全策を強め、職員の技能もモラルも高めねばならない。

四月に施行された障害者差別解消法は、障害者の生きづらさを和らげるよう周りに配慮を促している。障害の有無にかかわらず、人の尊厳と平等を守り、支え合う共生の大切さをいま一度考えたい。

事件に教訓を学び、安心安全な社会をつくり続けねばならない。

社説：障害者施設殺傷／事件の予兆はあったのに 神戸新聞 2016年7月27日

26日未明、凶悪な事件が起きた。神奈川県相模原市の知的障害者施設で就寝中の入所者が次々襲われ、19人が亡くなり、二十数人が重軽傷を負った。警察に出頭し、殺人未遂などの容疑で逮捕されたのは26歳の施設の元職員だった。

包丁とナイフ計3本や結束バンドを忍ばせ、居住棟の窓ガラスを割って侵入したとみられる。計画的な犯行の可能性が高い。襲われた入所者はいずれも急所の首の部分に刺されたり、切られたりしており、容疑者の強い殺意が感じられる。

障害者という無抵抗で弱い立場の人たちにやいばを向ける、卑劣な犯行と言うしかない。調べに対し容疑者は容疑を認め、「障害者なんていなくなっただけでいいと思った」と供述しているという。

なぜそこまで敵意を抱いたのか。容疑者が施設に勤務していた4年の間に何があったのか。動機など事件の全容を解明してもらいたい。

事件の予兆はあった。今年2月に東京の衆院議長公邸を訪れ、手紙を渡そうとしたことが明らかになっている。手紙では「私の目標は重複障害者の方が安楽死できる世界」などと主張、施設の名前を挙げ「標的とします」と書いていた。

職場でも同様の趣旨の過激な言動を繰り返したことから、施設が警察に通報した。その際の事情聴取でも「いつでも大量殺人する」と話したという。

このため相模原市は精神保健福祉法に基づき措置入院を命じている。検査の結果、大麻の陽性反応が出たが、その後症状は和らぎ、反省の言葉もあったため退院した。

何度も事件の具体的な予告がありながら、なぜ犯行を防げなかったのか。警視庁と神奈川県警、さらに相模原市など関係各機関の対応について、今後の検証が必要だ。

事件は全国の障害者の入所施設に衝撃を与えた。施設の防犯対策については国の具体的な規定はなく、事実上現場に委ねられている。神戸の関係者によると、対策は入所者の見守りが中心で、悪意を持って不審者が侵入するケースなどは想定していないという。人員や予算の面からも難しい対応を迫られる。

施設だけの問題ではない。社会全体でいま一度、子どもや高齢者、障害者を真ん中にした安全な地域づくりを見つめ直したい。

【主張】相模原大量殺人 措置入院の徹底的検証を 産経新聞 2016年7月27日
戦後最悪の大量殺人である。相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で未明、元職員

の男が次々と入所者をナイフなどで襲い、40人以上を殺傷した。
就寝中の被害者らはほとんどが無抵抗のまま首などを刺され、傷の多くは骨に達していた。悲惨で痛ましく、卑劣極まりない犯行である。

神奈川県警に逮捕された男は、「障害者なんていなくなっしまえ」などと供述しているという。男は今年2月にも施設の関係者に「障害者を殺す」と発言し、同県警津久井署が事情聴取した。

同じ2月には、同趣旨で犯行を予告する手紙を衆院議長公邸に持参した。今回の凶行の手口は手紙の内容に沿っていた。その後、男は「他害の恐れがある」として精神保健福祉法に基づく措置入院となり、3月に退院していた。

措置入院の解除、退院は指定医が判定し、自治体の判断を仰ぐ。大量殺人を予告し、警察の聴取を受けた男が、措置入院を経て強い犯意を持続させ、実行に及んだのだ。措置入院の期間や解除の判断は妥当だったか。警察や「やまゆり園」は解除や退院後の男の動向について情報を得ていたのか。

措置入院の経緯とあり方を徹底的に検証しなければ、再発防止の教訓とすることはできない。

平成13年、大阪教育大学附属池田小学校に男が押し入り、次々と包丁で切りつけ、児童8人を殺害した。男は犯行の2年前にも傷害容疑で逮捕されたが、「精神安定剤依存症」の診断で処分保留となり、措置入院となっていた。この事件でも措置入院は、凶悪な犯行を防ぐことができなかった。

池田小事件をきっかけに17年には、裁判所が医師の鑑定をもとに指定医療機関への入院を命じることができる心神喪失者等医療観察法も施行されたが、精神保健福祉法と併せ、社会の安全を守るには多くの問題点を残す。

池田小事件の被告に死刑を言い渡した大阪地裁の裁判長は、判決朗読の最後に、「子供たちの被害が不可避であったはずはない、との思いを禁じ得なかった。せめて、二度とこのような悲しい出来事が起きないように、再発防止のための真剣な取り組みが社会全体でなされることを願ってやまない」と述べた。

改めて反省を、強く社会で共有する必要がある。

捜査に不備なかったか検証必要 専門家指摘 障害者施設殺傷



NHK ニュース 2016年7月26日

警察の捜査について詳しい、常磐大学の元学長の諸澤英道さんは、今回の事件について、「未然に防げそうなポイントは多く、不備がなかったか検証が必要だ」と指摘しています。

諸澤さんはまず、容疑者の事件前の行動について、「犯行を予告するような手紙を書いたり、大麻の陽性反応が出たりするなど犯罪を犯す可能性はあった」と述べたうえで、「本当は警察と

行政が連携して対応していく必要があるが、実際は縦割りで、それぞれの立場で判断しているのが現状だ」と指摘しました。

さらに「措置入院後の対応も決まっていない事が多く、家族が面倒を見るといっても、

犯罪の傾向が顕著な場合には負担が大きすぎ、警察や行政が積極的に関わっていく必要がある」と話しています。そして、「今回、大勢が犠牲になってしまったが、事件を未然に防げそうなポイントは多く、法制度に不備がなかったか検証が必要だ」と指摘しています。

措置入院解除巡る連絡体制 自治体間になし

相模原市精神保健福祉課によりますと、市では、措置入院が解除された患者についてその後のフォローのために、患者の住所に近い保健センターなどに連絡をして、職員が、定期的に患者の病状などを確認することになっているということです。

このため、植松容疑者についても、退院日のことし3月2日に、自宅近くにある津久井保健センターに連絡をしていました。

しかし、植松容疑者の措置入院を解除する際、病院から市に提出された書類には「退院後は家族と同居する」と記され、家族の住所は別の自治体になっていました。

相模原市によりますと、自治体の枠を越えて解除の連絡をする仕組みはなく、家族の住所がある自治体には連絡はしなかったということです。

相模原市精神保健福祉課は「他の自治体への連絡体制が整備されていなかったのは問題だと考えている。今後、仕組みを見直していきたい」としています。

【相模原19人刺殺】措置入院、退院して間もなく凶行 池田小事件の教訓生かされず

産経新聞 2016年7月26日

相模原市の障害者施設殺傷事件の植松聖容疑者（26）の中学時代（中学の同級生提供）。目立ちたがり屋な性格だったという＝26日、相模原市緑区千木良

障害者施設に侵入した男が19人を殺害した悲惨な事件。男は以前から奇行が目立ち、相模原市が決定した措置入院から退院して間もない凶行に、海外にも衝撃が広がった。行政と医療、司法の連携は取れていたのか。児童8人が犠牲となった大阪教育大付属池田小児童殺傷事件の教訓は生かされなかった。

相模原市緑区で26日、障害者施設「津久井やまゆり園」の入居者ら40人以上が死傷した事件で、逮捕された元職員、植松聖容疑者（26）は、精神保健福祉法に基づき3月2日まで措置入院していた。

「自傷他害の恐れがある」人を医師の判断で入院させる措置入院制度だが、退院後に殺人などの凶悪な事件を引き起こしたケースは今回が初めてではない。元慶応大法学部教授（医事刑法）の加藤久雄弁護士は「15年前の池田小事件のころから変わっていない」と嘆く。

大阪教育大付属池田小学校（大阪府）に包丁を持った男が押し入ったのは平成13年6月8日朝。子供らに次々と切りつけて、児童8人を殺害、10人以上の重軽傷者を出した。

男はこの犯行の2年前に傷害容疑で逮捕。「精神安定剤依存症」の診断で措置入院となっていたが、男は約1カ月で退院し、直後に池田小事件を起こしていた。

今回の事件で逮捕された植松容疑者も、衆院議長公邸に手紙を届けた後、3月まで相模原市から措置入院の決定を受け13日間入院していた。事件は退院からわずか4カ月余りでの犯行だった。

加藤弁護士は「欧米のように、司法の判断に基づいて処遇するシステムを構築し、行政だけでなく司法も社会の安全を保障する責任を負うべきだ」と指摘する。日本では措置入院患者の退院後の行動について、行政や指定医が責任を負うわけではないためだ。

一方、精神障害者の家族会「全国精神保健福祉社会連合会」の小幡恭弘事務局長は「精神疾患そのものの偏見が解消されていない。措置入院させておけば解決するかといえば違う。地域の支えが重要だ」と訴える。

池田小事件の後、重大事件を起こしながら心神喪失などを理由に刑罰を科されなかった精神障害者の処遇を定めた「心神喪失者医療観察法」が成立するなど、精神疾患と犯罪と



の関係が注目されるようになった。

ドイツでは責任能力を問えない触法精神障害者でも裁判官が判決を宣告し、生涯保護観察が付けられるという。人権に深くかかわる困難な問題だが、加藤弁護士はこう強調した。

「この問題を解決しないと、今回やこれまでの事件のように、また弱い立場の人にしわ寄せがいつてしまう」

「プライド持って仕事していた人の犯行とは思えない。勤務状況の検証がカギ」大塚晃氏

大塚晃・上智大総合人間科学部教授（社会福祉学）の話「障害者施設の職員は、意思疎通が困難な入居者のニーズをどこまでくみ取り、実現できるかが最大の仕事。一定の教育を受け、スキルを磨くことが必要だが、それができないとストレスを感じることになる。容疑者は被害にあった入居者と顔見知りだった可能性があり、プライドを持って仕事をしていた人の犯行とは思えない。施設での仕事の役割や専門性の程度、上司や入居者とのやり取り、仕事を辞めた経緯など、勤務状況の検証が解明のカギとなる」

【産経抄】犯行予告がありながら 7月27日 産経新聞 2016年7月27日

山下清といえば、今も「放浪の画家」「裸の大将」として多くの人に親しまれている。もっとも放浪の途中では、ほとんど絵を描かなかった。緻密で色鮮やかな貼り絵や油絵の制作に取り組むのは、千葉縣市川市の養護施設「八幡学園」に戻ってからである。▼小学校でひどいじめに遭った清は、12歳で学園に預けられた。図画の時間に貼り絵と出会う。ゴッホの研究者でもあった学園の顧問医師の指導を受けて、画才を開花させていく。園児たちの貼り絵の展覧会が開かれると、清の作品は大反響を呼んだ。▼相模原市にある障害者のための施設「津久井やまゆり園」には、149人が入所している。清のように、創作活動に励んでいる人もいたかもしれない。そんな山あいの静かな施設が、血まみれの地獄絵図と化してしまった。▼26日未明、刃物を持って侵入した26歳の男によって、惨劇は引き起こされた。入所者は首などを刺され、19歳から70歳まで男女19人が死亡、26人が重軽傷を負った。犯行後に警察に出頭した男は元職員である。

春秋 日本経済新聞 2016年7月27日

日本人とユリのえにしは古い。古事記では神武天皇の皇后選びの場面に現れ、万葉集にも10首ほどが詠まれている。なかでもヤマユリは、この時期に直径20センチもの花が咲く。白い花卉の真ん中には黄の線が入り、無数の赤い斑点が彩る。微風にも揺れるほど、丈は高い。▼その名を付けた相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で、犯罪史上でも例を聞かない事件が起きた。26歳の元職員の犯行という。短夜とはいえ、まだ暗い丑（うし）三つ時に凶器の刃物を持って施設に侵入した疑いがある。かなり綿密に計画を練っていたのだろう。社会に出て数年しかたない若者は、一体何に駆られたか。▼教師を目指して、市内の小学校に教育実習に赴いた時期もあったらしい。その姿と、事件直後に「障害者なんていなくなればいい」と供述した姿の間のギャップがあまりに著しい。施設の入所者に危害を加えることを示唆する手紙を衆院議長に渡そうとしていたという。一読、背筋に寒けが走る。凶行の予告だったろうか。▼世界各地で起きるテロや銃の乱射。理不尽な信条を力で押し通す排除の原理が、ついに私たちの身近でも暴発したかのようだ。社会のどこかに温床があったのでは、と胸に手を当ててみる。野のユリは自然の摂理のまま美しい。人間も生まれながら無限の可能性を持ち、自己を実現する権利を持つ。若者は学ばなかったか。

